



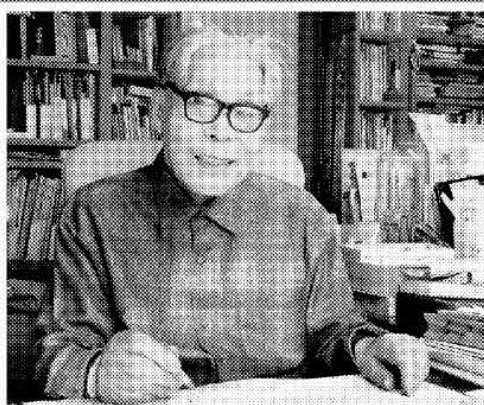
長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」は「痛くない死に方」は「いづれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

還暦を過ぎると、同世代が集まっても艶っぽい話は姿を消して親の介護話や病氣自慢と寂しいかぎりです。明るいネタといえば、孫の話題くらいでしょうか。

孫は最高の薬です。末期がんの患者さんでも、孫との触れ合いにしばし闘病を忘れるほど元気になることもあります。「若い孫に絵本を読み聞かせるのが最高の幸せ」と、先日は患者さんの家でたぐさんの絵本を見せてもらいました。

日本の子どものほとんどが、この人の作品に触れて大人になることでしょう。『だるまちゃん』シリーズや、『からすのパ

107 絵本作家 かこさとし



「子供には自ら伸びていく力がある」と話すかこさとしさん

「かこさんが亡くなったのは、2018年5月2日のこと。享年92。死因は、慢性腎不全でした。」

腎臓の役割とは血液から不要なものを分別し、尿として排出、体内の水分を調整します。その他にも血圧のコントロールやホルモンを分泌するなど、重要な働きを担っています。しかし老化とともに腎臓の機能は衰えていきます。

若い人の急性腎不全なら、治療によって腎機能を回復させることが可能ですが、糖尿病や加齢に伴い徐々に機能が低下する高齢者の慢性腎不全は、薬による血圧管理や、塩分と水分を抑えた食事療法によってある程度進行を遅らせることはできても、回復は見込めません。かこさんは90代だったので、その最期は老衰死とほぼ同じと考えていいでしょう。透析を受けることもなかったようです。

いた絵本のテーマは、「水」。『みずとはなんじゃ?』というタイトルでした。徐々に容体が悪くなり、もう絵を描く体力がないと感じたかこさんは原作だけを書き、亡くなる2カ月前に、絵を鳥の巣研究で知られる絵本作家の鈴木まもるさんに託しました。水の性質を紹介しながら自然環境まで思いをはせるこの本は、大人も必読の一冊です。

水を考えることは、命そのものを考えるのとはほぼ同義です。老いとはすなわち、枯れていくこと。身体に占める水分量は、小児で8割、成人6割、高齢者は5割です。

鈴木さんとかこさんの「水」のやりとりは、かこさんが亡くなる直前まで続いたそう、

「休むのは、死んでから休みます」と話していたそう。なんとこの使命感か。

戦争を体験したかこさんには、常に反戦の思いがありました。「私の子ども時代はずっと戦争で文化に触れる機会などなかった。繰り返してはならない」と。絵本一冊、孫が読めないような悲惨な時代に時計を戻してはならないのです。

「休むのは、死んでから休みます」